徒然草『花は盛りに』定期テスト対策問題　解答・解説

問1　意味＝イ（かげり・曇りがない）。
「隈」は物陰・暗い部分の意で、「隈なし」は「暗いところ・かげった部分がない」、つまり一点の曇りもなく澄みわたっている様子をいう。ここでは雲ひとつない満月をさす。

問2
(1) 反語。係助詞「かは」が文末で反語を表し、「…だろうか、いや…ではない」と打ち消しの気持ちを込めて問いかける用法。
(2) （訳）花は満開のときだけを、月は曇りなく澄みきったときだけを見るものだろうか、いや、そうではない。
(3) （例）盛りでないものにも美がある。（※「盛りだけが美ではない」など可、十五字以内）

問3　（訳）雨に向かって（見えない）月を恋しく思い。
※降る雨に阻まれて見えない月を、心の中で恋い慕う、の意。

問4　家の中に引きこもって、（外に出ず）春が過ぎてゆくのも知らないでいる人の様子。「垂れこめて」は簾などを垂らして家の中に閉じこもること。直接花を見ていなくても、その人なりに春を惜しんでいる点に趣があるとする。

問5　（やはり・それでもなお）の意。「それでもやはりしみじみと趣が深い」とつなぐ。

問6
(1) 終止形「あはれなり」。形容動詞（ナリ活用）の連用形が「あはれに」。
(2) ウ（しみじみと心打たれる）。

問7
(1) 「ぬ」＝完了（強意）の助動詞「ぬ」の終止形。「べき」＝推量・当然の助動詞「べし」の連体形。連用形「咲き」＋「ぬ」＋「べし」で、「きっと咲きそうだ／今にも咲きそうだ」という強い推量（確述）を表す。
※「ぬ＋べし」は、完了「ぬ」が下の推量を強める「強意（確述）」の用法。
(2) （訳）今にも咲きそうな（咲いてしまいそうな）ころあいの梢。

問8
(1) 直前の係助詞「こそ」を受けて、文末が已然形「多けれ」で結ばれているから。
(2) 係り結び（の法則）。「こそ」は已然形で結ぶ。

問9　（例）①今にも咲きそうな（つぼみの）梢。　②花が散ってしおれた庭。
いずれも「満開」ではない状態であり、盛りの前後にこそ趣があるという主張を支える具体例。

問10　（さしさわる・さしつかえる）の意。用事ができて出かけられない、の文脈。

問11　（訳）「花を見て（詠んだ）」と言っている歌に劣っているだろうか、いや、劣ってなどいない。
※文末「かは」はここでも反語。

問12　花を見られなかった事情（散ってしまった・用事で行けなかった）を詞書に記すのは、実際に花を見て詠んだ歌に少しも劣らない——むしろ見られなかった心残りにこそ深い情趣がある、と言いたいから。直接見ることだけが鑑賞ではない、という主張の例証になっている。

問13　（散る花や傾く月を）心ひかれて慕わしく思う、惜しむ、の意。

問14　（とりわけ・特に）の意。

問15　風流を解さない、無風流で頑固な人。ものの情趣がわからず、満開や満月といった「見た目の盛り」だけを美しいと決めつける人をさす。

問16　筆者は否定的に評価している。「かたくななる人」（無風流な人）の例として挙げ、盛りの花しか認めず「今は見どころなし」と言い捨てる態度を、情趣を解さないものとして退けている。

問17　（例）花や月は、満開・満月といった盛りの状態だけが美しいのではなく、咲く前のつぼみや散った後、見えない月を思う心にこそ、いっそう深い趣がある。（四十字以内に調整可）

問18

(1) イ（余情・無常）。盛りを過ぎてゆくもの、欠けたものにこそ趣を見いだす感覚。

(2) 余情（よじょう）。直接表されていない部分に漂う味わい・余韻。

問19

(1) 兼好法師（吉田兼好／卜部兼好も可）。

(2) 随筆。

(3) イ（鎌倉時代末期）。

問20　残り二つは『枕草子』（作者＝清少納言）と『方丈記』（作者＝鴨長明）。

問21　冒頭で「盛りだけ・満月だけを見るものか（いや、そうではない）」と反語で問題提起し、以下に述べる「不完全なもの・見えないものにこそ趣がある」という主張全体の方向を一文で示す、文章の核（テーマ提示）の役割を果たしている。以降の具体例（雨の月、散った庭、歌の詞書、かたくなな人）はすべてこの主張を裏づける。

© 誰でも古典塾　kotennosennsei.com